プロテストを受容する政治文化に関する実験的研究

――Factorial Survey による検討――

山形大学　山本英弘

1　目的

世界価値観調査等の国際比較調査に顕著に表れているように、国際比較によると日本ではデモなどのプロテストへの参加経験者や参加意向を持つ人々が少ない。このような日本の政治参加の特徴を詳細に明らかにするためには、社会全体でプロテストを受容する政治文化がどの程度形成されているのかという観点からの検討も重要だと考えられる。

そこで本報告では、人々がイッシュー、規模、行為形態、警備の厳しさといった特徴をもとに、プロテストをどのように評価し、参加を許容する態度を形成しているかを、factoral survey に基づく国際比較分析から検討した。

2　方法

2017 年 2 月に、日本、韓国、ドイツ、アメリカの 4 カ国において、18～79 歳の男女を対象に、政治意識と政治参加に関する質問紙調査（ウェブ調査）を行った。サンプル数は日本 1,200、他の 3 国は各 600 である。

この調査の中に、プロテストに対する態度と参加許容度を尋ねる factoral survey 的な質問を設けた。具体的には、イッシュー、規模、行為形態、警備の厳しさという 4 つの条件の組み合わせからなる仮想のプロテスト状況に関するビニエットを 12 通り設定し、無作為にほぼ同数の回答者を割り当てた。そして、それぞれの状況について正当性、代表性、有効性、秩序不安に関する評価と、自分自身および社会一般に参加してもよいかどうかについて質問した。これを用いて、プロテストの特徴によって、人々の評価がどのように異なるのか、そして、こうした特徴や態度が参加の許容度にどのように結びつくのかを検討した。

3　分析結果

分析は、12 通りのプロテスト状況をマクロレベル、回答者個人の属性をミクロレベルの独立変数とし、プロテストに対する評価、および参加許容度を従属変数とするマルチレベル分析を行った。主な知見は以下のとおりである。

１）プロテストの特徴に対する評価については、各国に共通して、規模が大きいほど世論を代表しており、有効であると考えられている。規模の大きさは参加許容度とは直接関連しないものの、代表性、有効性ともに社会的にも個人的にもプロテストを許容する態度と結びついている。このようにプロテストの規模が高い評価を媒介して間接的に参加許容度に影響を及ぼしている。

２）イッシューが特定的であるほど社会的にも個人的にも参加が許容されない。イッシューの特定性はまた、秩序不安感と結びついており、それを介してプロテストへの参加許容度に負の影響を及ぼす。

３）他の 3 国と比べて、日本の参加許容度が個人的にも社会的にも低い。さらに、プロテストの特徴にかかわらず、日本では他国よりも正当性、代表性、効果に関する評価が低く、秩序不安の恐れが抱かれている。こうしたプロテストに対する評価の低さを介して、参加を許容しないという態度が形成されるメカニズムを見て取ることができる。